

ボルタンスキーから見たブルデュー社会学の再構成

——「原初状態」概念の検討を通して——

慶應義塾大学 小田切祐詞

1 目的

この報告の目的は、リュック・ボルタンスキーが2009年の著作で提示した「原初状態」概念を検討することによって、彼がピエール・ブルデューの社会学をどのように捉えていたのかを再構成することにある。ボルタンスキーは、ブルデューを師事していた研究者の一人であると同時に、最もラディカルな形でブルデューから離れた人物でもある。原初状態概念が提示されるに至った背景を詳らかにすることは、彼がブルデュー社会学をどのように捉え、それからどのように距離を取ろうとしたのかを明らかにしてくれる。このようにボルタンスキーの歩んだ軌跡を検討することは、「ポスト・ブルデュー」の一端を明らかにする一助となるだろう。

2 方法

ブルデュー社会学が真正面から論じられたのは『批判について』(2009)においてであるが、それ以前にも陰に陽にブルデューへの言及が行なわれていた。上記の目的は、この散り散りになされた言及をまとめあげる作業を通じて達成される。

3 結果

分析の結果、ブルデュー社会学が二つの点から特徴づけられていたことが明らかになる。一つ目は、文化的内面化の所産である性向が強調されることで、社会生活における不確実性が過小評価されている点。もう一つは、社会関係が力や利害といった点に還元されることで、行為者の規範的要求がないがしろにされている点である。

このような傾向に抗して、ボルタンスキーは、力関係が比較的均衡した、合意を目指して正当化や批判が行なわれる論争を、主要な分析対象に据えた。

しかし、その際、人々に共通感覚という名の能力が想定されることにより、強調されるべきだった不確実性が簡単に吸収されてしまう理論構成になってしまった。この失敗が、ボルタンスキーに、「根本的不確実性」を特徴とする原初状態概念を構想させる一因となった。

4 結論

ボルタンスキーは、原初状態に根本的不確実性、すなわち、存在するものがどのようなものなのか、何が重要であるのか、何が価値があるのかに関する不確実性を置いた。ここでは、利害闘争ではなく、合意の困難性が強調されている。

力関係や利害関係ではなく、行為者が不確実性に直面している場面を分析の出発点に据えるこの種の概念の中に、我々は、ボルタンスキーがブルデュー社会学に対してとった姿勢との連続性を見出すことができる。

文献

Boltanski, Luc, 2009, *De la critique: Précis de sociologie de l'émancipation*, Paris: Gallimard.